

会議録(概要版)

審議会等の名称	第1回山口市スマートシティ推進協議会
開催日時	令和2年9月28日(月曜日)14:30~16:10
開催場所	山口総合支所 3階 第10・11会議室
公開・部分公開の区分	公開
出席者	松野浩嗣委員、杉井学委員、中川健一委員、濱田泰委員、大田正之委員、永久弘之委員、山本庸子委員、会田大也委員、田中光敏委員、中島和彦委員、鈴木文彦委員、兒玉達哉委員、高田新一郎委員、藤井智佳子委員、田中貴光オブザーバー
事務局	山口市総合政策部スマートシティ推進室
次 第	<p>1 開会</p> <p>2 市長挨拶</p> <p>3 委嘱状交付</p> <p>4 委員紹介</p> <p>5 会長・副会長選任</p> <p>6 議事</p> <p>(1)スマートシティ推進ビジョンの策定について</p> <p>①スマートシティ推進ビジョン策定の方向性</p> <p>②時代の潮流や全国的な課題</p> <p>③本市における現状と課題</p> <p>(2)会田委員からの話題提供</p> <p>(3)意見交換</p> <p>7 今後の日程</p> <p>8 閉会</p>
議 事	<p>1 開会</p> <p>2 市長挨拶</p> <p>3 委嘱状交付</p> <p>・委員を代表して、松野浩嗣委員に交付</p> <p>4 委員紹介</p> <p>5 会長・副会長選</p> <p>・会長:松野浩嗣委員、副会長:杉井学委員</p> <p>・松野会長挨拶</p> <p>6 議事</p> <p>【会長】</p> <p>まず、議事に入ります前に、委員の皆様にお願いがございます。本協議会の会議は、原則公開で行い、会議録を作成するために発言内容を録音いたしたいと思えます。なお、録音のため、お手数ですが、発言の際はマイクの御使用をお願いいたします。</p>

また、会議録については、市ホームページ等で公開したいと思いますが、皆さんよろしいでしょうか。

【委員】

(うなずかれる。)

【会長】

ありがとうございます。それでは、引き続き、次第に従い、6番目の「議事」に入らせていただきます。

ここで、次第に沿って進めますと、議事の1番目の「スマートシティ推進ビジョン策定について」となるところですが、会田委員が所用により、この後、15時30分頃に御退席されますので、順番が前後しますけれども、まず、議事の2番目の「会田委員からの話題提供」から行いたいとおもいます。よろしいでしょうか。

【委員】

(うなずかれる。)

【会長】

では、委員の皆様から御了承いただきましたので、それでは、会田委員の方からプレゼンの方をよろしくお願いいたします。

(2)会田委員からの話題提供

【会田委員】

はい。すみません、時間を取らせていただきます。

私は山口情報芸術センターのアーティストディレクター、学芸普及課長という形で仕事をしております、会田といいます。こんな大きな会になるイメージを持っていなかったのですが、イメージ統一のための資料を共有しておくというのでは、と提案させてもらったところ、こういった時間をいただきました。

私自身が山口情報芸術センターで働いていたのが2003年から2014年まで、11年やった後に、東京大学の大学院でワークショップデザインを行っていました。その間にベンチャーやIT、ICTにまつわる企業と連携をして大学院の教育を行っており、そこで人のつながりが出てきました。そこで、ある国のスマートシティの立ち上げみたいなことの御相談を受けて、検討委員会のメンバーの一人として話をしていたことがあったので、その時の知見などを山口市で活かせるといいなと思ったので、簡単にこういう未来を考えている人もいるんだ、という話をちょっと共有して、イメージを統一できるとこの後の話もスムーズになるのではないかと考えています。

資料2の方に書いてありますが、現状すでに数多くのスマートシティの実証実験がたくさんあることは皆さんご存知と思いますが山口市がこういった形、ゴールイメージをもって検討していくのか、ということを経営的に考えていかないとですね、他のところでよくやっていることを追いかけていっても、プレゼンスというか、立ち位置が曖昧になってしまうことがありますので、そういったことで、すでに全部検討することも必要ですが、それとは別に、別の観点から少し遠くの話をしていくのがいいのかなと思っ

ています。

3ページ目ですけど、住民の考え方や行動が変容するって書いてあるんですけど、実際、技術自体を持ってきて運用したとしても、それ自体に意味があるというよりは、そこに住んでいる人たち自身がどういう風に行動とか考え方とかが変わっていくか、というところの部分が一番重要になると思っていますので、その部分を考えるために4ページ目、いわゆる移動の問題とか交通の問題とかがよくスマートシティでよく言われますけど、現状、実現可能性が高いものとして紹介されるその Mobility as a service だとか、トヨタの実証実験でやるバスですね、無人のバスとか公共交通のイメージがあるんですけど、こういったものはいわゆるスマートシティのときには出てくるイメージだと思うわけです。

実際、世の中の的には次にページにあります、板を踏んでいる、板自体が車であって、体重の移動によって移動出来たりとか、止まったりだとかが出来るものです。いわゆる、これまで、昔にいくつかパーソナルモビリティということで、2輪だけのタイヤだけができたりしていましたが、それより更に小さい、靴に入るサイズなんですね。普通のリュックだったりとか、ハンドバックなどに入る車と思って、電車と組み合わせせどうやって移動していくのだとか、もしくは自転車のかごに放り込んで、自転車で行けないところにどういう風に移動していくのかと言うような話をしていくことが前提になっている。下の方は映像で見せたかったのですが、ご存じの方も多いかもかもしれませんが、いわゆる宅配便のロボットですね。サイズ的には60センチ四方ぐらいの箱でタイヤが付いていて、アマゾンなどの荷物が入るようなものです。このぐらいのもののロボットが、ちっちゃい単位で、のべつ幕なしに移動する。いわゆる宅急便と言われている巨大なトラックが、大きい荷物をたくさん積んで移動して行って順繰り回るというイメージから、まったく違うところに行って、荷物そのものにタイヤがついているイメージ。細かい単位で荷物が移動していくというような未来がもう実際、実証実験されている。そうなるとどうなっていくかと言いますと、もちろん車は人間にぶつかることもないし、そもそも重量がないのでぶつかったとしても大きいけがにもならないわけですけど、人間が今道路というものは車が第一に走っていて、子どもたちに対しても交通事故に遭わないように、車をどう避けるかということを人間側に教えているルールになっているところなんです。それをまったく逆の方向から考える。つまり、人間が歩くのが基本になっている道路がありまして、その間を自動的に避けてくれるタイヤのついたタニーがうろろうした形になっていくわけです。そうすると道路というものをどういう風に建設していくかって、発想自体がまったく逆から考えていかなきゃいけない、っていう風な状態を今、いくつかをスマートシティ会議では話しています。つまり、道路設計そのものがこの幅が必要になるとかの話を発想の起点を置く、軸足を置くという話ですね。

次のページにいきますけど、管や線というインフラは必要かという話ですけど、これは東京大学初のベンチャーで WOTA という会社があるのですが、日本のベンチャーです。使用した水の98パーセント以上をリサイクル可能としている。具体的に言うと、

水のフィルターっていうのがありますが、フィルターだと大体詰まる場所が一カ所に集中しちゃって、その部分がかえなくなっちゃうので、大体フィルターが使い物にならなくなるという問題があるので、そんなに再生率が多くないわけですけど、このフィルターに関しては自動的に AI で粒のごみを鑑識していて、どこのフィルターに振り分けるのがいいのか、一番合理的な弁を調整しながら適切なフィルターに通すことによって、シャンプーで洗った水や体を洗った石けん水をリサイクルして瞬間的に飲める水に代えたりするみたいなことをしている。アメリカなんかであるバーニングマンって言う砂漠の中で行われているイベントでも大活躍している。

実際に水道インフラから切り離せるかを考えるためにこういった話をしています。つまり、水道がなくなると家を購入したり所有したりする概念自体が、電気や水がオフグリッドになることですね。そもそも固定した不動産って言うものを持つという考え方自体を全然違う発想に転換していく時代が来るのではないかと、そういった時代をその先で人間がどう暮らすかを見てみたいということ、北川さんっていう社長、30歳ちょっとの、その彼が言っていた。

この考え方は飛んでいるのかもしれませんが、掃除機の考え方が変容した例を皆さんご存知と思いますが、つまりルンバのような自動掃除機があることによって、我々が家具を置くこと自体を変容させたということですね。

つまり、ルンバに掃除をさせやすいように家具の配置を変更させる。高いところに荷物を置く。すなわち、それが整理整頓につながっていく。ホコリを取るルンバが、人間の生活のスタイルというか、家具の配置だったりだとか、ルンバに掃除をさせやすい形に変わっていく。結果的に掃除というものを人間とロボットのコラボレーションの形に変えていったというような事例です。

スマートシティが実現していくプロセスには従来道理ではない、形ではない行動変容がセットになってくるのではないかとということを一応前提に話をしたほうがいいのではないかと思います。

その話はテクノロジーだけでは幸福は訪れない、という話なのですが、最後のページは、これも映像を見せないと分かりにくいのですが、アメリカのベンチャー企業の Zipline という会社ですけれど、もともとは AI によって大気の状態を予測するということが可能なベンチャー企業でした。この企業が何をやったかという、上昇気流を捉えるということをやったんですね。上昇気流を捉えると何ができるかという、ヘリコプターのドローンは大体5キロくらいしか飛ぶことができないそうなんです。つまりどうということかと言いますと、大きくすると電池が重たくなるので、結局、大きくなっても小さくなくても5キロしか飛ばない問題があるのですが、彼らは上昇気流を捉えることによって、いわゆるグライダー型のドローンを作りまして、上昇気流がどこに発生するかを瞬時に割り出してですね、その場所でプロペラを使って高度を上げる。その飛行機はほとんど電池を使わない状態で遠くまで飛ぶ、100キロまで飛ぶドローンが作れるわけです。

彼らは投資家たちに相談してアメリカでサービスを行いたいという話だったんです

が、アメリカは許認可がすごく難しい、航空法だったりだとか。そこである投資家が、ルワンダに行きなさいと言ったそうです。ルワンダはご存じの通り内戦が続いており、道路がズタズタでインフラがほとんど機能していない。で、電気も通っていないところが多く、病気で亡くなっている人も多いですけれど、その人たちに国連から血液製剤が届くんですけど、ただし、それが届いても現地に冷蔵庫がなく全部腐られている現状がありました。そこで、彼らがやったことと言いますと、ルワンダは国が小さいですから、2カ所の拠点だけドローンの発射基地を作りまして、そこにだけ血液を送っていただく。病院はありまして、電気が通っていないクリニックからここに血が欲しいということを使うと、荷物を箱詰めして、そこに飛んで行って、半径2~3メートルくらいですが、落とす。そしてまた戻ってくるということをしている。

つまり、技術としてはできていたものをルールとか制度が認可できないということで、イノベーションになっていなかったものを、まったく同じ技術のままスライドさせて、ルールがある意味緩いルワンダという地域において有効な形で生かされた。最近ですけど、数万人、4万人の命を救ったということで、本国アメリカでも実証実験につながった。技術そのものが素晴らしいから世の中が素晴らしいものになることはなく、すでにある技術でも分脈が変わってくることによって意味のあるものになるのではないかという話です。つまりこう言ったビジョンや知見を、市役所を含めて委員の皆さんと共有しながら今後の話をしていけるといいのではないかと思います。私からの話題提供は以上にさせていただきたいと思います。

【会長】

会田さんどうもありがとうございます。今の会田さんのお話について、御質問等がある方はおられるでしょうか。よろしいでしょうか。では私から一つ。

ルンバの話とか分かりやすいですが、行動変容ですね、そもそもルンバですと掃除がしやすいように、家具の配置を変えるということですよ。最近ではコロナでうちの大学もオンライン授業をやったりしていますけど、あれもまさに、今回、行動変容を起こす大きなきっかけになると言われていますけど、そのことについて、会田さんについて何かこういうことが変わってくるんじゃないかとか、アフターコロナ、ポストコロナにおける考え方などがあればお聞かせいただきたい。

【会田委員】

ありがとうございます。私も色々な学校で非常勤講師をやっている、オンライン授業をするのですが、学生さんにお話を聞いてみると、やっぱり会って話したり、授業を受けたりする方が嬉しいという話の方が圧倒的に強い。行動変容って僕は言いましたけど、そんな簡単に進むものではないと個人的には考えているところがあります。ただし、もちろん一部、こういったダイナミックな動きをしなければ分からないこともありまして、事例としていいかわかりませんが、大学の授業なんか、録画した授業をオンデマンドで別の時間に見るということをやっている大学もあつたりしまして、いわゆる大学の授業自体、情報の伝達というパターンで言えば、その時間っていうのが変わっていく、もしくは通学、通勤時間を圧縮することが出来る、豊かさが生まれてきたとい

う話を学生からも言われていますし、僕自身も自宅でリモートワークしているときなんかは、会議が終わった30秒後に家族にご飯を食べられるのはいいなと思ったりするところ。一方で、今日みたいに直接顔を見合わせてお話をするということの価値も永遠に変わらないだと思っています。逆に一層その価値が高まり、理解が深まったと思います。

行動変容と一口にいっても、人間のもともと持っている気質に沿っている風になったという重要な問題がありますし、何でもかんでもドラスティックに変わっていくと言ことはないと思っています。一方で、こういったコロナの影響により無理やりですね、行動変容させられてしまったことによって、むしろ、以前よりもこっちの方が過ごしやすいのではないかと気づく、っていうチャンスもまだあるのではないかと考えています。これは常にテクノロジーが生まれてきた過程ですと何回も起こってきたことであり、電話やテレビ、ラジオが出てきた瞬間もそうですし、特にラジオは多くの聴衆に向けて、あなた、という二人称でしゃべることでそれがまた嬉しかったりすることがあるわけです。

こういった行動変容と言われているものが、力によって変更することと、同時に、その力があつたからこそ、その内側で欲望として何を持っているのかがあらわになることが同時にあるので、これはまさにイメージーションをたくましくして、こういった技術を送り込まれたときに、どういう風に山口市において行動が変わるのか、変わらないのかを慎重に検討良くことがまさに、この会議なのではないのかなと思っています。

【会長】

どうもありがとうございます。皆さんの方からなにか御質問等はありませんでしょうか。では、会田さんどうもありがとうございました。

どうでしょう、会田さんは時間になりましたらどうぞご退席いただけたらと思います。ほぼ1時間経ちましたから換気しますが、では、事務局の方からよろしく願います。

【事務局】

はい、それでは今から換気とパソコンの設置を含めまして15時10分まで、3分ほどお時間をいただけたらと思います。それではよろしければ、そのままお待ちください。

(1)スマートシティ推進ビジョンの策定について

【会長】

それではですね、会議を続けさせていただきます。まずは、議事の1番目に戻りまして、「スマートシティ推進ビジョン策定について」ということで、資料1ですかね、ご覧ください。では、事務局から説明をお願いしますか。

【事務局】

(資料1「スマートシティ推進ビジョン策定について」説明を行う。)

【会長】

ありがとうございました。何かこの時点でお聞きしたおこととかありますでしょうか。

(3)意見交換

では、議事を進めさせていただきます。つづきまして、議事の3番目の意見交換といたしまして、委員の皆様からただいま事務局から説明がありました内容を始め、それぞれのお立場や業界等で感じている課題、今後の予定されている取組などについて、自己紹介を兼ねまして、お一人ずつ3分程度を目安に、ご意見とかを言っていただけたらと思います。特にスマートシティということ正面から話されなくても、自分のところでこういう仕事をしていて、こういうことに困っている、こういう情報があったら、データがあるけどどういことが出来るか、みたいな自分のことを絡めて話をいただけると十分かと思います。

それでは、杉井委員から反時計回りに自己紹介とご意見をいただけたらと思います。それではよろしくお願いたします。

【杉井委員】

始めまして。山口大学国際総合科学部の杉井学と申します。よろしくお願いたします。私現況の専門としては、生物学と情報科学とを合わせたような情報生物学という研究をやっておりますが、国際総合科学部というところに所属してまして、特徴がありまして、我々の学部生は2年次に後期から3年次の後期まで一年間ほぼ全員が留学してまして世界各国に飛び立つわけです。

この一年コロナで出かけられないということがありますが、そろそろ再開されそうです。という機運が高まっています。そういうこともありまして国際化、世界から見た日本やまぐちというところに非常に力をおいておりまして、学生達にもそういう視点を教育しているところです。

それからもう一つデザイン思考というところに非常に力を入れておりまして、ソサエティ5.0というところで今盛んに言われていますけれども、人間中心の考え方、デザイン思考もまさにそういうことなんですけれども、人間を中心として科学技術や、物事を考えていくべきだろうというところにも力を入れております。ですので、私自身は研究としてはそういうことをやっていますけれども、デザイン思考に基づく考え方、であるとか国際化に関してどう貢献できるのかというところでいろいろな意見等々をできればいいかなと思っております。よろしくお願いたします。

【会長】

ありがとうございました。なお続いて中川委員の方からお願いたします。

【中川委員】

ご紹介いただきましたNTT西日本の中川と申します。よろしくお願いたします。

先ほど会田さんとのご説明ただいている中で、市の特性や方向性が重要だと思って聞いていたんですけど、そのためには一度作っておしまいではなくって、サステイナブルなスマートシティにしていかななくてはいけないのかなと思っていて、そのためには、その特性を活かしていかに外からお金をもってくるのかというふうな話であるとか、活性化とかいうところを目的とするならば、やっぱり地域内の循環だとか促進しないとイケない。渡辺市長が言われたようにそれを実現するためにお金をかけても意味がないので、省エネ低コスト体制の確立をすることがすごく重要なのかなというふうに思っています。私 NTT 西日本という立場で今回参加させていただいているのは、おそらく、いろいろな自治体とか含めてスマートシティの取り組みにお手伝いさせてもらっている事もあるのかなと思っています。

具体的には、札幌市とか熊本だとか和歌山とか、いわゆる、そのブラウンフィールドというふうな既存の街をどうするかということと、皆さんご存知のトヨタのウーブンシティなど新しい街を作るグリーンフィールドに参画させていただいておりますので、そういったところでうまく情報としてインプットさせてもらいながらこのわが町山口を盛り立てるような形でお手伝いできればというふうに思っています。と言いながらも、やっぱり札幌なんかの事例でいうと冬、動態把握とかすると、日中に、台湾の方と違って公園にすごくいかれるのですよね。やっぱり雪が降らないから雪が珍しいとかっていうことですけど、そういった情報をベースに、じゃあレンタルスキーをしましょうかとか言って、その収入が増えたとかいろいろ事例が有ったりするんですけど、じゃあこれを山口でそのまま活用できるかという違うので、山口として何を強み、特性とするかということをやっぱり決めて、次どう進めるかということを考えることが非常に重要だなというふうに思っています。 よろしくお願ひします。

【会長】

ありがとうございます。じゃあ続いて濱田委員お願いします。

【濱田委員】

こんにちは。私は株式会社コアの代表をしています濱田と申します。会社は広告の仕事をしているのですが、会社の中にデジタルハリウッドスタジオ山口というウェブの技術者を育成する専門学校を作っています。ここに呼ばれた理由がなんなのかはちょっとあるのですが、非常に、あの一市民みみたいなイメージですいません発言させていただきます。先ほど、この企画書についてご説明がありましたので、ちょっと直観的なんですけど、最初、松野先生が、データが大事なんだということを強くおっしゃいました。今、これから一年半一年少々かけてこれをまとめていくという作業を、もし、この回数でやっていくとしたら、やはりもうちょっと課題の抽出のところですね、データのもっと精査といいますか、あと、そこからだされる課題はなんなのかとか、あるいはスマートシティというものを目指す方向性はなんなのかというのをもう少ししていかないと議論できないなあという直感ですけど思いました。

そして、目指すのはここにある目的ということで方向性を書いておられる、誰もが豊かに暮らせる地域社会の構築、地域における新たな価値の創造という抽象的な、体面的な言葉ですけれど、ここは市民が納得するには何を、どういう見方にするとか、どういう価値を新たに山口に作りだすだけじゃなくて、今までのいいところを伸ばすということだろうとここは思うのですが、その辺を具体化していくのに、あまり正直なところおぜん立てが先にできているようなイメージがします。

箱ものを作ったり、あるいはテクノロジーな話であったりというところは、ちょっと置いて、その前の話をここに集まっている皆さんとするないし、分科会なりするという方がいいのかなと思っております。以上です。

【会長】

どうもありがとうございます。続いて大田委員お願いします。

【大田委員】

山口商工会議所の大田と申します。どうかよろしくお願ひいたします。

ご案内の通り、新型コロナによりまして、中小企業の状況と申しますと大変厳しい状況が続いております。6月、7月の売上げが、前年度2割、3割といった事業者の方も多く存在しております。それと、中小企業のデジタル化はどうかと言いますと、大変遅れておる状況で、なかなか経営者の方も興味を示しておられない状況であるのが現状でございます。その中で、来年の4月には、この土曜日に上棟式がございましたけれども、新山口の方に新たな産業交流拠点施設がオープンすることになっていまして、山口商工会議所もそちらの方に一部入居いたしまして、新たな事業展開をやっているところでございます。

そこにおきましては、現在検討中ではございますけれども、DX デジタルトランスフォーメーションを使いまして、市民の様々なニーズ調査、データ蓄積を行いまして、新たなビジネスモデルの構築ができないかなというふうに思っております。

先ほどからございますけれども、データの蓄積を進めまして、AI 等も使いまして新事業へのチャレンジ、新たな事業展開、そうして若者がどんどん増えていくことを期待しているところでございます。このような若者の流入によりまして、人口増に繋げていきたいというふうに、そういった機会になればというふうに思って取り組んで参りたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

【会長】

はい、どうもありがとうございました。では、続いて永久委員お願いします。

【永久委員】

只今ご紹介いただきました山口県農業協同組合山口統括本部の永久弘之と申します

私のほうは、主に農業関係のスマート化ということで、お声をいただいたとそのような感じておる次第でございます。

冒頭のご挨拶の中で、山口市の農業担い手がなかなか育っていないというお話がございました。実はかなりの高齢化が進んでおるところでございます。

JA山口県としてはですね、実は人間を動かして、毎月1回、農家のお宅にまだ訪問という活動を実は続けております。しかし、毎月毎月訪問しておりますが、大事なことはなかなか伝わらない。

この度も皆さまご存知かと思いますが、山口市内の水稲であります、ウンカで非常に被害を受けておられると、今までみたこともないような水稲を目にしたり、たんぼの地面が真っ黒になっているような状況を、この度お見掛けになったのではないかと思います。そういったことも、組合員の皆様にご周知するように一生懸命心掛けたつもりではございますが、デジタルで通信を行い、また、チラシを配っても残念ながらその被害について全然おさえることができなかったそういった状況でございます。

昔であれば家族農家、家族で農家を経営しておられました。それから、農業大規模化すれば、この農協組合については、後継者は十分満足できるだろうということで、農村地域を中心に各個人農家がお集まりになって法人経営ということをされています。しかしながら、今、法人経営でさえ、後継者がなかなか難しいという話があって法人同士の合併とか、また、新たな展開が今農協組合では示されておるところでございます。先ほどのラインアカウント等も、この山口市の概ね中心部の中央営農センターから、実は農業情報を発信しておったところでございますが、なかなか登録も思うようにできずに、まだ農業情報については、十分皆様のほうにご周知できてないといった状況でございます。将来的には、例えば携帯で写真をパッと撮ったら、これを過去、こういう農薬をやって、こういう肥料をやり、この天候から予測すると何日目にこういった農薬をやったら成長まですべて順調にいくんじゃないですかといったような、スペシャリティなシステムなどでできればですね、農家の人のずいぶん手助けができるんじゃないかなといったところでございます。

こういったいろんな分野の皆様方のお話を頂戴いたしまして私も勉強させていただいて農業組合として、少しでもお役立てができていけばとそのように考えております。ひとつよろしく願い申し上げます。

【会長】

どうもありがとうございました。続いて山本委員お願いします。

【山本委員】

はい、やまぐち産業振興財団山本と申します。

当財団はですね、全県対象として中小企業の支援をしております支援機関でございます。

今年、コロナの関係で、中小企業様が打撃を受けられていらっしゃる場所が多ゆ

うございますので、県の方、また、国の方からですね、相談窓口をいち早く立ち上げていくことで、流通支援拠点というかたちがありますのでその辺で経営相談等いろんな中小企業さんのためになるような支援策を紹介したりとか、そういったかたちで支援をしております。

また、県の方から、補助金等そういった事業とかも委託いたしまして、皆様方に補助を交付したり、そういう事業をしているところでございます。

当財団は、先ほど商工会議所の大田専務のほうからもありましたように、上棟式がございました、新山口の産業拠点施設の方に来年度6月をめどに入居をする予定でございます。そういった中で地の利を生かしたといえますか、そういったところで人の賑わいを醸し出すような、そういった事業が展開できたらということと、中小企業さんは、零細からまた中堅、中核企業までいろいろ幅広く担当しておりますので、データサイエンティストとは何ぞやというような企業様から、また、ものづくり企業で DX とか、そういうのを活用して産業の活性化、そういう産業に結び付けるような事業等をですね、また、今年度も山口市様と一緒に事業を展開させていただいている部分もありますので、またこれを引き続きですね展開ができればいいなというふうに財団としては思っているようなところでございます。

こういったもろもろの事業の展開をしながら、今後スマートシティとかというような形で、今回新山口に移転してしますので、そちらのほうで、皆様方のご意見等いただきながら企業様の支援ができればいいなと思っておりますのでよろしく願いいたします。

【会長】

どうもありがとうございました。今日は、オブザーバーでニューメディア推進財団の田中さんが来られていますので一言いただけますか。

【田中 貴光】

ありがとうございます。山口県ニューメディア推進財団の田中と申しますよろしく願いいたします。

私の方ですが、6月1日から、山口県未来技術活用統括官ということで県の未来技術を活用した取り組みを、AIなりまたIOT、またそれに伴う5Gの活用であるとか、そういうところの施策に関する企画の部分であるとか、どういうふうに進めたらいいのかということですね、ご相談いただいたところに対して一緒に県の予算とか考えながら進んでいくような業務をさせていただいております。

また、市町さんにおかれましても、ICTの推進に向けてどういうふうに進めていったらよいか、また、同様に5Gをどう活用していくかだとか、ICTをどう活用するかこれについても、ご相談をいただきながら、課題解決に向けて一緒に取り組んでいく業務になっております。

わたしもこのスマート推進協議会においては、そういったところの活動も踏まえま

て、どうしたら山口市の中でスマートシティが実現できるかといったところにいるいろいろご協力できればなというふうに思っていますのでよろしくお願いいたします。

ニューメディア推進財団の事業というところでいきますと、今年度、未来技術を活用したプロモーション事業ということで、県内の企業さんであるとか、その皆さんに対してどういうふうに未来技術、例えばスマートシティもそうでしょうし、AI を活用して観光とどう結びつけてやっていくかというところについて、専門家のかたをお呼びしてセミナーをやり、そこから事業に向けたアイデアとか、人と人との関係性をつくりあげていくような営みを今、進めようとしております。こういった取り組みを含めながら山口県全体の未来技術の活用というところの醸成というか、底をあげるところをやっているように思っていますのでその辺を含めてご協力というかお話ができればなというふうに思っています。

私、自身感じるところでいきますと、各自治体さんの方にもお話をいろいろお伺いしたりしますが、やはり、スマートシティというかそういったその技術を活用する時に、やっぱりメリットがあるのか、実際にお使いになられる方のリテラシーというか、どう使っているかとか、やっぱりなかなか普及しにくいという声を自治体さんの方からもお伺いしたりしています。その垣根とかハードルをいかに下げられるかというか、どうしたら違和感なく使っていけるような、均一感とか取り組みを、ぜひつくりあげられたらなというふうに思っていますので、その辺を含めてですねいろいろ議論させていただければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

【会長】

どうもありがとうございます。それでは次に藤井委員お願いします。

【藤井委員】

はい。NPO 法人あつとの藤井と申します。よろしくお願いいたします。

私は子育てがハンデではなくアドバンテージになる社会へ向けた事業を、西門前商店街にホットサロン西門前「てとと」という親子の交流するスペースなんですけれども、そこを拠点に子育て支援や教育労働など様々な分野を横断した事業を展開している団体です。

子育てというと人と人の繋がりとか、交流ありきと思われるかもしれませんが、やはり、最近のお母さんたち皆さんスマホを持ってスマホでなんでも検索して、育児をしているような世代になっています。

そんな中で、山口市の保育の情報や子育ての情報を検索すると、なかなかこう上手くフィットしないというか、子育てしやすいような情報は得られないし、保育の待機児童も数字で見ようと思うと、やはり電話をかけてひとつひとつ聞かないといけないというところで、なかなかまだまだスマートフォンを通して、子育ての情報を知り得ることが難しい状況であるなと思いますし、私達も何度も母子手帳のアプリ化や、先ほどいいました保育の待機を数字で見れるシステムはできないだろうかということで何度か

お話をさせていただいているんですけれども、これもまだ難しいというような返答で、課題はたくさんあるんじゃないかなと思っております。

そんな中このコロナ化で私たちの「てとてと」の拠点は 閉休しないといけない期間が一月ありまして、おかあさんたちの子育てを支援することができなくなった期間があった時に、助成金を利用して広島県がすでにやっていた、オンラインの子育て支援というのを始めました。山口市さんのさっきの公式ラインがあるように、私たちも同じような公式ラインを作って、またオンラインで子育て支援ということなので、一緒に手遊びしましょうとか、家にいるお母さんたちが孤独に感じないようにいろいろな講座を提供してズームを利用して、お母さんたちと沢山交流をしました。延べ2か月で60人くらいのお母さんたちと交流して SNS でもラインなので相談しやすいようで、すぐ育児に行き詰っているコロナで大変な思いをしているというような相談も何件も寄せられております。そういったお母さんたち子育てする人達が相談しやすいような体制をそういうふうにデジタル化を、ちょっとずつ、していけないといけないんじゃないかなあというふうに思っていますので、これから課題の整理をして設定する中で、そういったものを入れていただけるよう、私もいろいろ課題を提案していきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

【会長】

どうもありがとうございます。では次に高田委員お願いします。

【高田委員】

NPO 法人ほほえみの郷トイトイ事務局長高田と申します。

私たちは山口市の阿東地域で地域拠点の運営をしながら、安心して地域の皆さんが、人口が減っていても高齢化が進んでも安心して暮らし続ける地域を作ろうということで活動しています。

先ほど市からのスマートシティの説明もありましたが、私たちもテクノロジーが今どんどん進んでいますけども、ここに暮らす人たちが何を求めているのかを丁寧に掘り起こしながら、この人たちの望みを叶えることに、これを活用するという視点でいろいろ取り組みをしています。

やはり、アナログベースでないと、なかなか高齢者の方たちは満足を得られないことも多いんですが、今後、やっぱりそういう技術をうまく使うことで、人と人が対面することをより効率的にしていくということを今取り組んでいます。

また、先ほど会田委員さんからの資料の提供もありましたけど、ほんとに全く私も共感するところもあって、今、トヨタモビリティ基金さんと一緒に新たなモビリティの構築に向けた実証実験とかもやっていますし、企業さんからの申し出で、企業のテクノロジーを各地域、農村地域の高齢者のために、使えないかということでお話もいただいて、いろいろなチャレンジをしようとしています。ただ、すべてにおいて、ここで暮らす人、生活する人が中心にあるべきかなというふうには思っています。そして、その人

たちの考えている事、思っている事を、やはりとしっかりとくみ取って、そのデータとして蓄積していくことが、やっぱり必要かなと。としてもアンケートを取って上辺の傾向等を見てしまって、それでやってしまいがちですけど、その後ろにある本当の思いというか、皆さんのほんとのニーズというのがやっぱり隠れているのが地域の実情だと感じています。それを真摯にやっぱり受け止めて、スマートシティというかたちで、皆さんほんとに山口市の行政の方たちのほんとにこのすばらしい資料だと思いますので、この力を私たちのような農村地域にもしっかりと活用していただいて、まあ、山口市も広いですけども、山間部でも安心して暮らせるという地域を作って頂けるといいなと思っています。

また、コロナの影響で、今都市部の企業もそうですし、若者の農村への移住というのがやはり注目をされています。このことをチャンスととらえてですね、阿東の様な地域には遊休資産というか、使っていない資産であったり、建物というのが沢山あります。今から新しい物を作るというよりは、そういうものを再活用、自然も含めて、利活用という、うまくテクノロジーと合わせてやっていくことで、若者を呼び込む、それからシニア世代を呼び込むというようにいろんな世代がそこで暮らすということをイメージして、このスマートシティのお話に参加させていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

【会長】

どうもありがとうございました。続いて児玉委員お願いします。

【児玉委員】

只今ご紹介いただきました山口市医師会の事務長の児玉と申します。私の方は、医師会の方に、4月から勤務しておりますけども、104の医療機関がございまして、なかなか、今、皆さんからのご紹介がありましたけれどもコロナの関係で、今、なかなか事務の方も、大変な思いをしております。今、本当に日替わりメニューということで、今日来た文章が明日には変わっていると、また進化しているというそういう状況の中でオンライン診療等ともございますけれど、そういったところがなかなかうまくいっているようで、まだ、うまくいっていないというそういうような状況もございます。

それから、なかなか医師会の方も、診療情報そういったものがですねデータ化されてお互いがやり取りできるような、そういった形になればいいんですけど、今、昭和の県央地区、山口地域になりますけど、デルタネットというそういう地域あるいは介護施設のデータのやり取りができるシステム構築しておりますけれども、基幹病院とかかりつけのクリニック診療所、そういったところだけを結ぶという、そういう世界でございますので、なかなか横の連携がとれてない、そういうシステムのまだ問題を抱えておるところでございます。それと、普及も、まだ十分されていないというようなそういう状況もございます。

私も先ほどありましたけれども、4月から、まだ状況がつかめてない状況の中で、じつはその前に市役所の方に37年おりまして、さきほどちょっと藤井委員の方からもありましたけど、子育ての関係について最後関わらせていただきまして、やはり、なかなか、市役所の中でもそういった情報をうまく提供できていない、ロボティック・プロセス・オートメーション、いわゆるRPAというものを活用したりして、事業を進めていければ、ほんとにデジタル化というか、簡単にそういう定量的な作業のものが効率化、実際やってみるとですねできるんですけど、残念ながら業務に追われて、なかなかそこに手が届かない。やはり、そういうデジタル化によって、豊かなそういう形になるような、そういった形のをスマートにやっていただければと思っております。

ひとつ皆さんのご意見をお伺いしながらまた、医師会の中でもそういったところを日々努力をしながらやっていきたいと思っております。ではよろしくお願いたします。

【会長】

どうもありがとうございました。続いて鈴木委員おねがいます。

【鈴木委員】

私は、肩書は交通ジャーナリストというふうになっております。本業はその名の通りで交通に関する執筆をするのが本業ですけれども、そういう作業を続ける中で、ここ10年、20年くらいのところは各地の交通政策や、交通ネットワークづくりなどにお手伝いをしているところです。

実は、山口市では公共交通委員会の副委員長ということで、副市長が委員長で、私が副委員長という形で、もう13年くらいになりますかね。その前の交通まちづくり委員会というのをやっていた時からですから、実は山口市の公共交通にか関わってもう16年くらいになります。その間、いろいろな山口市の公共交通をどういうふうに、いいものにしていくかという議論をいろいろやってきたんですが、論点として、交通に関しては3つくらいあるのかなと思っております。

1つは、全域の市民の交通手段を確保しつつ全体の提供できるネットワークをいかにつくるかという点と、それからこれがおそらく議論の中では一番大きい部分だなと思うんですが、もう一つは、山口の都市核の部分、それからそこから繋がって新山口までの、いわゆる一番の都市機能が集まった区間、この地域の公共交通を、どう維持するというよりも活性化していくかという問題と、それからもう1つは、山口へ来た人がきちんと山口市内で動いてもらえるかどうかあたりになろうかと、この3つになろうかと思っております。

1つ目のことについては、長年いろいろな形で高齢者の主な対象ではあるのですが、そのほか子供たちであったり、あるいは子育て世代であったり、多くの人たちがちゃんと普通の生活の中で移動できるような手段だとか仕組みがちゃんとできるかどうかということと、それを適切に繋ぎながら、市内で生活移動ができるかどうかという

あたりいろいろ議論しながら、また道半ばではありますけれども、基幹交通を整備し、それに付随する生活交通を地域で作っていくような形を構築しています。

2つ目については、やはり都市部でそれなりに利便性高く設けるにはどうするかということ、どうしても車の非常に多い、つまり、渋滞であったり、そういったような問題との整合をどうしていくかということがどうしてもありますので、いかにスムーズに公共交通を使っただけのようなしくみを作るかといったようなことが、やはり議論の対象になってくると思いますが、この辺についても道半ばではありますけれどもいろいろ工夫を重ねてきているところかと思えます。

3つ目については、今ちょうど、県の新たなモビリティのいわゆるマースの考え方を入れた議論をし始めたところですので、そういう意味では、ちょっと丁度タイムリーなところなのかなという感じもしております。

こういうような3つの課題に対して、いろいろ議論を進めてきたところなんです、ここ数年のところを、公共交通の方も担い手が非常に少なくなってきた、いわゆるバスやタクシーの運転手不足という問題が非常に厳しくなってきたところに加えて、今年のコロナの状況の中で移動そのものが減ってくるというような状況がありますので、いわゆるサービスを提供する側の課題も大きくなっているというような状況の中にあるのは事実かと思えます。

ですから、コロナで移動そのものがどんなふうに変っていくのかあたりのところを見極めながらの考え方というのも、これから必要になってくるかなあというふうには考えているところです。

なお、交通の分野では、最初に松野先生がおっしゃっていただいたデータを確実に残すことであったり、あるいはデータの横連絡をとるといったようなこと私もこれ非常に大切なことだと思うのですが、交通の分野では今まで全然進んでこなかった部分です。

ようやくオープンデータの議論がバス業界などで始められたところですので、これからのそういった流れに持っていかなければいけないんだろうと、のせていかなくちやいけないのだろうと、というふうに思っているところです。

実際に、いろんな施策を今後していく中において、今年度末から山口市でも3年間ぐらいの間にバスのICカード対応をします。全国共通なICカード対応をしますので、そういった流れとうまく結び付けていけば、こういったスマートシティの推進の議論の中でも交通側からの対応がしやすいのかなと、という意味では今回の議論は非常にタイムリーだったのかなと交通の立場から言うとそんな感じもしております。ひとつよろしく願いいたします。

【会長】

はい、どうもありがとうございます。では続いて中島委員お願いします。

【中島委員】

はい。サッカーのレノファ山口と申しまして、中島と申します。

レノファ山口というのを、スポーツで見ていただきましたが、あまり勝てない強くないサッカーのチームというふうに見られているかと思うのですが、最近、ちょっと客観的に言わせていただきます自分たちのことを。スポーツ自体が価値を見直されてきている中に、やはり、スポーツ自体がいろんなことを伝える力とかですね、伝えるとはスポーツイズメディアという言葉がお聞きになられたことがあるかもしれませんが、なにがしかのこと取り組みをしていたり、いろんな事業をしていっている事をですね、スポーツやアスリートが伝えていくとか、そういったことというのはよくいろんなケースであると思うのですが、そういった面で伝える材料として、ツールとして見ていただいたりとか、それから、団体同士を繋ぐ力というように見直されています。ステークホルダエンゲイジメントスポーツという考え方とかが出てきていたりするので、非常に自分たち自身を客観的に申し上げさせてもらおうと、伝える力ですとか、繋ぐ力というのを活用いただくようなですね、スポーツ選手が伝えたりするとわかり易かったり、伝わり易かったりするというような力を、いろんなテーマで活用いただくような観点で、弱いのですが、見ていただけると見方も多少変わって頂けるかなと思いますし、是非よろしく願いいたします。ありがとうございます。

【会長】

はいどうもありがとうございました。じゃあ最後でしょうかね。田中委員お願いします。

【田中委員】

山口観光コンベンション協会の事務局長をやっております田中でございます。よろしく申し上げます。

私どもの協会ではですね、2つの柱をもって事業を運営しております。

1つは大会、学会の誘致をして山口の方に来ていただくと、そしてもう一点は観光情報の発信であるとか誘客事業に携わっております。

主には観光交流人口の拡大に向けて日々活動しているような具合でございます。来年には先ほどから出ております産業交流拠点施設の中の多目的ホールの方が7月にオープンをいたしますので、より学会誘致等については、実績を上げて行かないといけない、取り組みを強化していくような具合でございます。

また、交通に関して、先ほど鈴木委員さんの方からマースのアプリの実証実験が今年度から始まってタイムリーだというお話がありましたが、非常に本当にありがたいアプリ開発がされると思っております。

ただ、そのアプリというよりも、やはり例えば、山口の市中の方にお客様に足を運んでいただくための魅力を発信しないことには、いくら交通等が整備をされても、なかなかやはり、足を運んでいただかず、そのまま、新山口から交通の便がいいということも

ありまして、直ぐ宿泊もせずお帰り頂くということがあるのではないかと考えております。そのために、それぞれ観光地の魅力づくり磨き上げを今後さらに力を入れたいと考えております。

例えば、AR 技術を使って、観光先の方で仮想現実、拡張現実を見て頂けるような形であるとか、今後できないだろうかというふうを考えております。

具体的には、一例といたしまして、来週ですが、瑠璃光寺五重塔の塔内の撮影をさせていただくことになりました。ご住職のご理解を頂いて、今後、もっと山口の魅力を発進するためには、こういった日頃開庁されていない塔内を皆さまに見て頂くようにしないと、なかなか来ていただけないのではないだろうかということもありまして、ご理解を頂けて撮影をする運びになりました。こういったことも含めてきっちりと魅力発信、磨き上げをしていって、スマートシティについてもよりよいものとなっていくように努めていきたいと考えております。以上です。

【会長】

どうもありがとうございました。これで委員のすべての皆様から、一言づついただきました。今のお話について、何かこの委員にこういうことを聞いてみたいとか、あと、まあ総合的なことでもなんかお考えがあればご発言いただきたいと思っておりますけれどもいかがでしょうか。よろしいですかね。

今のお話をお聞きしてですね、それぞれの立場でお話いただいたのですけれども、例えば、聞いていて思いついたことですが、私、今、山口がやっていますバスがどこを走っているかというバスイットというのがありますよね、あれを YAF 使うんですよ。僕、宮野にいますけど、そこから山口市街とかですね、湯田温泉に行く時使ったりします。あれ自体もバスの運行情報を、時々刻々データがとられている、データが出ているはずですよ。

例えば、ひとつのデータの組み合わせ方として、山口、雪が多いので、雪の時、ぼくはバスに乗って行ったのですが、大学に行くためにですね。昔のセンタービル、昔からおられる方はわかると思いますけど、今 YAB と、中電前というバス停です。あそこで乗り換えるのです。そして、まず宮野からのバスが遅れて、それから、そこからのバスも遅れて、天気が悪くなると遅れるっていうのはだいたい皆さん認識されていると思います。あれも、その日の天候の情報を例えば一緒にとってですね、それをずっと蓄積しておく。そしたらこういう天候の時には遅れると、それも、例えば阿東の方または萩の方にも JR のバスが行ってましますけども、例えば、そのバスに、水を検知するような物とかを付けたりして、そうじゃなくても、今割合、細かい地域ごとに天候の情報が出ますから、そういうものを組み合わせると、どういう天候の時どこでバスが遅れるのか、というふうなことが後から取れますし、あと、さっきあの鈴木委員から、今度、バスカードじゃなくてスイカみたいなもので、ああいうものでやると、たとえば、僕さっき乗り換えするって言いましたけども、乗り換えしたときにどこから来た人がどこに行くのにどのくらい遅れたのか、というふうなこと時間を込みで知ることができま

す。そうすると、朝に遅れるのか、夕方に遅れるのか、まあだいたいそのラッシュ的なことに遅れると思いますけども、そういうふうなことをするとですね、それをまた市民の生活に役立てていく、このくらい遅れるからじゃあこのくらいの時間に出ればいいというふうなことです。こういうことがデータの組み合わせによる価値の創造になります。新しい価値を作って生活を便利にしていくということですけど、そういうことが、交通の便がよくなれば、今、山口市内のところに人を運ぶっていうふうなことにも、勿論直結をいたしますし、まあ DX の話とかもありましたけれども、そういうのが新しいビジネスに繋がるようなこともあるかと思います。そういうふうな、データを貯めて、連携して新しく価値を生むというふうなことが、これからのスマート社会、ここではスマートシティですけど、そういうことに重要であろうというふうな思っています。

後、今日の資料の 18 ページのところに、やはり山口も最初に市長さんの言葉にあったと思いますけど、広いですから、どういうふうに全市的に、中心部、都市核としては、今、山口の都市核と小郡の都市核がありますけども、それをまあ高めていくか、そういうことでそのための概念図のようなものだと思いますけれども、現状、山口市としては地域交流センターがあちこちにあるんですけど、これはまあ箱物ですけども、こういう所を拠点にして、いかに情報を通すかということで、先ほど会田委員の話の、水道の話があったと思います。水道は確かにフィルターをやれば、綺麗にして使う、あと、電気も、太陽光発電とか蓄電できるようになれば、それで電気も賄うことが、技術が進めばいけると思います。

それも、2つの生活に必要なインフラですけども、今はそれにプラスして、もう当たり前になりますけど、情報のインフラがあります。光ファイバーが、もう大体がどの家にも入っているという状況で、情報のインフラは、個人の家だけではだめで、外と繋がらないとどうしようもならないものであるということです。ああいう情報インフラは、いかに整えていくかということ、そういうことに対してはですね、こういうそれぞれの拠点というか地域に、地域交流センターのようなものがありますから、ここをそれぞれの地域の核として情報をどういうふうに伝えていくのか、どういうふうなことに活用するようなことになるのかと考えております。

それから、新山口には産業交流拠点の施設ができます。ここは、その名の通りですね産業交流拠点施設ということで、今の状況、今回、その現在の県内の状況といえますか、スマートシティのこういう協議会もできましたけれども、産業の活性化というのはいろんな産業がありますけども、表、裏どちらでも、必ずこういう情報を扱うことで、データを扱うことが、離れ切っても切れない話になってまいります。ということで、産業交流拠点施設へ、いかにそのデータ活用のための、ここがアイデアを生み出すような地域にするか、というふうなことはですね、山口市としては今後も整備されるわけですから、そういうふうには是非活用していくのがいいというふうな思っております。

あと、最後のページのところにプロジェクト名がありますけども、いろんな山口市さんで作られる今の小郡の産業拠点、あと、市内の中心商店街とかいろいろありますけれどもプロジェクトごとに書いてありますが、是非、これのデータ連携を進めていく

	<p>というふうな視点を持ってやっていくのがよろしいかというふうに考えております。少し長くなりましたけれども、今のお話を聞き、考えたことを話させていただきました。何か質問とかあったらお受けしますけど。よろしいですかね。</p> <p>それでは、今後のことですが、第2回、第3回の協議会につきましても事務局からは各分野における現状や課題等について資料の提供をいただいて各委員の皆様からの資料の今日の会田委員のように提供いただいてそれぞれの分野における意見交換、課題分析できたらとお願いいたします。</p> <p>幸いなことにいろんな分野の方が、出ておられますので、そこでの課題をいろいろ話していただければというふうに思っております。</p> <p>それでは、次第の9番目、今後の日程につきまして事務局から説明いたします。</p> <p>【事務局】</p> <p>はい皆様ありがとうございます。次回第2回の推進協議会でございますが、11月の26日木曜日の14時から場所はですね湯田温泉でございます防長苑でございます。こちらで開催させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。</p> <p>また、本日の会議時間の関係上ご発言しきれなかった部分のご意見、ご質問などございましたら、お手元に資料6として意見書を添付しておりますので、こちらにご記入頂き、事務局事務局まで送っていただければと思います。次回の協議会で回答させていただきたいと存じます。事務局からは以上です。</p> <p>【会長】</p> <p>どうもありがとうございます。ここまで会議全体を通じて御意見はございませんか。よろしいですかね。</p> <p>ないようでしたら、以上をもちまして、今日の会議を閉じさせていただきたいと思っております。</p> <p>それでは、進行を事務局にお返しします。</p> <p>8 閉会</p>
配布資料	<p>次第</p> <p>資料1 「スマートシティ推進ビジョン策定について」</p> <p>資料2 会田委員提供資料(※委員提供資料については非公表)</p> <p>資料3 委員名簿</p> <p>資料4 配席図</p> <p>資料5 「山口市スマートシティ推進協議会設置要綱」</p>

	資料6 意見書 参 考 「第2期山口市まち・ひと・しごと創生総合戦略」
問い合わせ先	総合政策部 スマートシティ推進室 TEL 083-934-2728